

今回は、まず「**連体詞**」から確認します。連体詞は名詞を修飾する語（連体修飾語）です。ただし、現代語で連体詞とされる「わが」「かの」などは「名詞＋格助詞」とされるのでこの点は注意が必要です。読解や入試で重要な連体詞を以下に挙げます。

1. マークすべき連体詞

- ①ありし … 以前の、昔の
- ②ありつる … 以前の、さっきの
- ③あらぬ … ちがった、ほかの
- ④なでふ … なんとという
- ⑤させる … たいした
- ⑥去んじ … さる

次に、「**副詞**」を扱います。副詞は用言（動詞・形容詞・形容動詞）を修飾する語（連用修飾語）で、状態の副詞、程度の副詞、呼応の副詞があります。以下に、意味を押さえておくべき状態・程度の副詞と、呼応の副詞をまとめておきます。

2. 意味を押さえておくべき副詞

(1) 状態の副詞

- ①やがて … そのまま／すぐに
- ②おのづから … 自然と／たまたま／ひょっとすると
- ③さながら … そっくりそのまま
- ④やをら … そっと
- ⑤つと … じっと、そのままずっと
- ⑥つとに … 早朝から
- ⑦かたみに … お互いに
- ⑧つくづくと … しんみりと
- ⑨せめて … 強いて、無理に

(2) 程度の副詞

- ①なほ … やはり
- ②いとど … ますます、いっそう
- ③さすがに … そうはいうものの（やはり）
- ④やうやう・やや … しだいに、だんだんと
- ⑤なかなか … かえって

※ 状態か程度か、はっきりしないものもあります。なので、この区分はあまり気にする必要はありません。むしろ、上記の語の意味をしっかりと押さえておいてください。入試問題では、意味を問う問題としてしばしば出されます。

次に呼応の副詞ですが、これは陳述の副詞とも言われ、主として文末の語と呼応して、不可能や禁止などの表現を生み出す副詞です。とても重要な文法事項であり、大学入試での頻出事項となっています。以下に主だったものを挙げておきます。

3. 呼応の副詞

- ① え～ず … ～できない
- ② な～そ … ～しないでくれ
- ③ あへて・たえて・さらに～ず … まったく～ない
- ④ つゆ～ず … 少しも～ない
- ⑤ をさをさ～ず … ほとんど～ない
- ⑥ よも～じ … まさか～まい
- ⑦ たとひ～とも … たとえ～としても
- ⑧ 早く～けり … なんと～だよ
- ⑨ まさに～んや … どうして～か、いや、～ない

さて、ここまで「連体詞」と「副詞」を見てきましたが、基本的には語と意味の的一对一対応で、知識があれば対応できます。次の練習問題に取り組んでみてください。

練習1 次の口語訳の空欄を埋めよ。(解答は章末)

- ① なでふことなき人の、笑がちにてももの言ひたる。

[口語訳] () こともない人が、笑みを浮かべながら何か言っている様子。

- ② ありつる小桂を、さすがに御衣に引き入れて

[口語訳] () 小桂を、() お着物の中に引き入れて

- ③ 女君は、あらぬ人なりけりと思ふに

[口語訳] 女君は、() 人であったなあと思うにつけ

- ④ 薬も食はず、やがて起きもあがらで病みふせり

[口語訳] 薬も飲まず、() 起き上がることもなく病み伏せっている

- ⑤ 契りきなかたみに袖を絞りつつ

[口語訳] 約束しましたよね、() 袖を絞りながら

- ⑥ 心づきなきことあらん折は、なかなかそのよしをも言ひてん

[口語訳] 気にいらぬことがあるような折は、() その理由を言うのがよい

- ⑦ ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど

[口語訳] 所々を語るのを聞くと、() 知りたいという思いが増すけれど

練習2 次の古文を口語訳せよ。

- ① え進まず。 ()
- ② ほととぎす、な鳴きそ。 ()
- ③ さらに見ず。 ()
- ④ つゆまどろまれず。 ()

⑤をさをさ劣らず。 ()

⑥いまだ遠くはよも行かじ。 ()

さて、ここまでが「自立語・活用なし」の品詞の解説です。

続いては、「自立語・活用あり」の品詞になります。すなわち、「用言」（動詞・形容詞・形容動詞）です。名詞が「主語」になれることをその性質の一つとするならば、用言は述語になれることを共通の性質としています。

用言には、「未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形」の六つの活用形がありますが、これは主として「用言の下に接続する語の違い」によって変化するのです。例えば、動詞「咲く」ならば、下に打消の助動詞「ず」が来ると「咲か」「ず」となりますし、下に助詞の「ども」が来ると「咲け」「ども」となるわけです。

この六つの活用形には、それぞれ特徴がありますので、それをここで簡単に見ておきましょう。

4. 活用形の機能

①未然形…単独用法を持たない唯一の活用形。動作の不完全、又は未実現を表す形。前者から、構造転換をもたらす助動詞（受身、使役）が接続し、後者から未実現の性質を持つ助動詞、助詞が接続する。

助動詞一る、らる、す、さす、しむ、ず、む（むず）、じ、まし、まほし
助 詞一ば [仮定条件]、で、ばや、なむ [あつらえ]

②連用形…動作の既実現を表す形。そのため、過去、完了の助動詞などが接続する。また、動詞は複合動詞を形成、形容詞・形容動詞は動詞を修飾する。

助動詞一き、けり、つ、ぬ、たり、けむ、たし
助 詞一て、つつ、ながら

③終止形…動詞の原形と考えてよい（動作そのものを表す）。文末言い切りもあるが、動詞の原形という性格から、判断を加える助動詞などが接続する。

助動詞一べし、まじ、らし、めり、なり [伝聞推定]、らむ

*ラ変では、連体形接続となるので注意

④連体形…体言が接続する。断定の助動詞「なり」が接続する。（連体形の下に体言がない場合、無音体言があると考えられる）

助動詞一なり
助 詞一格助詞、副助詞、係助詞（連体形は体言と同じ扱いになるため）
係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」の結び

⑤已然形…確定順接、確定逆接を表す形。接続語は限定される。

助 詞一ば [確定条件]、ど（ども）
係助詞「こそ」の結び

⑥命令形…命令、言い切り。接続語はないと考えられる。

上記の内容は、助詞や助動詞の知識が必要だったり、他にも少し難しいところもあるの

で、当面、「そんなものか」と思っておいてくれればいいと思います。

今回は、「用言」のうち、動詞を見ていくことにしましょう。

※ 「活用形」について、もう少し知りたいという人向けに、ちょっと蘊蓄を記しておきます。あくまで参考なので、興味があったら読んでみてください。

まずは、「未然形」。この形は単独で出現することがありません。例えば、「咲く」という動詞なら、「咲か」と、単独で出現することがないわけです（他の活用形は単独で出現することが可能です）。つまり、動詞として未完成の形であり、そこから「受け身」や「使役」といった、動詞を大きく補完する助動詞がついたり、まだ実現していないことを想定する助詞・助動詞が付いたりするのです。「未完の形」と思っておけばだいたい間違いありません。

一方で「連用形」は、「すでに実現している」ことを表す形です。なので、過去や完了の助動詞や、「て」のように時間の流れを表す助動詞が付いたりするのです。

「終止形」は、現在形というよりは「事実をそのまま表す」、いってみれば「原形」に近い形です。「京へ行く」という文は、「京へ行く」という事実のみを表し、現在・過去・未来といった時制とは、本質的に無関係です。こういう性質があるため、「事実」に「判断」を加える助動詞が接続していきます。

「連体形」は名詞を修飾する形ですが、助動詞「なり（断定）」や助詞も接続します。これは実は、目に見えない形式名詞が下の語との間に存在していると考えるのが合理的です。こういう形式名詞は、現代語なら格助詞「の」が該当します。例を挙げましょう。「町へ行く」という文を名詞に変えて主語にしようと思うと、こうなりますね、「町へ行くのが楽しみだ」と。この「の」が古文の場合、隠れているのです。しかし、口語訳するとあぶり出されます。

「女もしてみんとてするなり」→「女もしてみようと思つてするのである」

「月はくまなきをのみ」→「月は雲がないのをだけ」

こう考えるならば、「連体形」は「体言に接続する形」と割り切ることができます。

「已然形」はきわめて特殊な活用形で、順接・確定条件の「ば」、逆接・確定条件の「ども」しか接続しません。他の用法は係助詞「こそ」を受けて係結びになることだけです。もともとは二つの文を接続させる形だったと思われませんが、用法が限定的なので、これだけしっかり押さえておきましょう。

「命令形」は、今も昔も変わらず命令する形ですね。言い切りなので、せいぜい語調を整える終助詞が付く程度です。

ある程度勉強が進み、活用形の性格がわかってくると、文法問題の解決がずいぶん楽になります。「暗記」も大切なのですが、「理解」した方が定着しますし、また、楽しいと思います。今回はこれまで。

頑張ろう、東高！

練習1・解答

①なんという ②さっきの／そうはいうものの、やはり ③ほかの ④そのまま ⑤お互いに ⑥かえって ⑦ますます

練習2・

- ①進むことができない
- ②ほととぎすよ、鳴かないでくれ
- ③まったく見ない
- ④少しも眠れない
- ⑤ほとんど劣らない
- ⑥まだ遠くはまさか行くまい